

## 海の向こうから考える桜ヶ丘キャンパス：渡航体験記：Taiwan Orthodontic Society 2010 annual sessionに参加して

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 宮脇 正一   |
| 雑誌名 | 鹿児島大学歯学部紀要  |
| 巻   | 31  |
| ページ | 25-30   |
| 発行年 | 2011  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10232/17039">http://hdl.handle.net/10232/17039</a> |

## 『海の向こうから考える桜ヶ丘キャンパス』

## 渡航体験記 ~Taiwan Orthodontic Society 2010 annual session に参加して~

宮脇 正一

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 健康科学専攻  
発生発達成育学講座 歯科矯正学分野

先日、鹿児島大学歯学部紀要の編集委員長である田中教授から、海外で体験したことについて何か書いて欲しいとの依頼があった。随筆でも何でも良いとのことである。しかし振り返ってみると、大学を卒業してからこのかた、私は随筆らしきものを書いた記憶がない。情けないことに今では日常業務の一つになってしまったお説教や督促の文章であれば、それなりに書く自信はあるのだが...かえって、随筆のような面白い文章となると苦手である。そこで、どうにか理由をつけてお断りしたかったのだが、饒舌な田中教授の話術に乗せられ、気がつくやうと恥ずかしながら生まれて初めて渡航体験記を書く羽目になってしまった。さらに、「なるべく文章は面白く書いて欲しい」との追加注文もあった。どうしよう?ととりあえず、自分の文才の無さを写真でごまかしつつ、筆を進めることにした。なお、無駄な時間を費やしたくない先生方は、是非本稿を読み飛ばすことをお勧めする。

さて、私はこれまで十か国以上の国々を訪れたことがある。今の私の年齢から考えるとさして多いとは言えないが、昔から異国の地を旅することは楽しみの一つだった。もしも時間が許すのであれば、世界中を旅したいと思う位だ。こんな風に私が考える理由は、私よりも遙かに長い間仕事で外国に滞在したことのある祖父や父を始め、外国好きの者が私のまわりに多くいたということも多少あるかもしれないが、どうも私自身サプライズを受けることが好きであることが主な動機のようなのである。その点、大学人は海外の学会へ仕事として堂々で行けるので、とても都合が良い。私はこれまで、学会発表、Competitionへの参加、留学等で渡航してきた。しかし、教授着任後は教室づくりに

時間を取られ、当初は研究の進捗がややおもわしくなかったこともあって、海外に行く機会は殆どなくなった。けれども今回は、招待講演者としての招聘でこれまで行ったことのない台湾に行くということと、台湾の先生方のおもてなしは他の国々の方とは比べものにならない位すごいとの噂を聞いていたことも手伝って、台湾行きをとても楽しみにするようになっていた。ところがいいよ出発が近づいてきた今年の夏、突然想像もしていなかった不幸な出来事が次々と起こり、そのような出来事が引き金になったのか、これまで絶対的自信のあった鉄の身体が初めて悲鳴をあげたため、学術大会の直前だったのだがキャンセルすることを真剣に検討しなければならなかった。しかし、諸事情によりキャンセルもできず、今回私は、足下をふらつかせ、憂鬱な気持ちのまま、学術大会前日の平成22年9月3日早朝、福岡経由で台湾へと向かったのだった。

約3時間のフライトで台北の空港に到着後、指示通りに到着ロビーでお迎えの先生を探してみるが、誰も一向に現れない。無理をして台湾まで来たのに...とさらに気が滅入った。あと10分待つて会えなければ一人で行こう、そう考えていた矢先のことだ。Taiwan Orthodontic Societyの前会長と偶然にお会いして事なきを得た。そして、空港から約50分間、初めて見る台湾の風景や街並みを楽しみつつ学会会場(図1矢印)へ向かった。途中、黄色い屋根と紅白入り交じった壁が特徴の巨大な建造物を見かけた。その美しさと巨大さに目を奪われたが、それが何かは分からなかった。しかし、なんとなくその時初めて、台湾に来たのだなと実感した。また、台北市内の人通りは予想以上に多く、道路にはかなり大きな看板が当然のようにみ出



(図1)

して設置されている。無数のバイクが交通法規はどこに? というような感じで縦横無尽に走っているが、その様子には発展への活気が満ち溢れていた。その日の夜は学術大会の前夜だったので、市内の有名なレストランで開催されるという Welcome party に台湾の先生らに連れて行って頂いた。パーティーでは、久しぶりにお会いする現 Taiwan Orthodontic Society の会長の先生をはじめ、多くの台湾の先生方や大阪大学時代の先輩（日本矯正歯科医会という日本で最大規模の矯正専門医の会の会長や元大学教授）等の日本の先生方、その他、諸外国の先生方とともに地元で初めて食べる本格的な台湾料理を楽しませてもらった。ところで今回、台湾を訪問する前から少し違和感を覚えていたのだが、それは、どう言う訳か普通なら事前に送られてくるはずのプログラムや抄録集が全く送られて来ていないということだった。そんなことはすっかり忘れて食事を楽しんでいたところ、会場で大会長の先生が、にこにこしながらその送られてこなかったプログラムを持って私の所に現れた。そして、意味ありげな微笑を浮か



(図2)

べつつ、その表紙（図2）を私に見せるのである。そして、そこに描かれている右側から二人目の人物は誰だと思いかと尋ねてきた。そこにはラシュモア山の彫像などと呼ばれている、あの4人の男性が岩山に彫られている名所が描かれているようだった。確か有名なアメリカの大統領が彫られているあの光景だなということまでは思い出したのだが、それが誰かということまでは不意のことでもあり、よく思い出せなかったので、分からないと答えた。すると、さらに意味ありげにこの絵をもっとよく見て下さいと言う。じっと見るとメガネをかけているその人物の顔はどうも自分の顔のようにも見える。それで、私? と尋ねると、その通りですと笑いながら返答したのだ。さらに、その隣は誰、その隣は... というように説明を続けた。つまり、プログラム（図2）と論文集（図3）には今回の招待講演者4名が良く見なければ気付かないほど、一見、ラシュモア山の彫像そのもののようにデフォルメが施されて描かれていたのだ。思いもしていなかったいきなりの嬉しいサプライズと同時に、プログラムが事前に送られてこなかった理由がやっと分かったと納得がいった。それからは、明日からの学術大会がとても楽しみに感じられた。ただ、私がそれほど喜んだ本当の理由についてはここで、正直に説明を付け加えよう。その理由とは、プログラムの表紙に自分が描かれていたという、そのことよりもむしろ、今の状態からは想像出来ないほど、昔の剛毛だった頃の自分を思い出させるふさふさの髪の毛がそこに描かれていたということであった（図2、3）。さすが台湾の先生、噂通りきめ細かな配慮とおもてなしの心が大変素晴らしい、改めて感心した。



(図3)

学会初日、私の講演予定時間は午前10時半から昼までとのこともあり、学術大会開始前のスライド試写に赴いた。しかし、予想に反して、画像と音声がかまくま出ない。最初は、そう気にせずに、担当者とともに暫く作業を続けた。しかしいつもとは違い、なぜだかうまく行かない。この担当者は大丈夫なんだろうかと大きな不安に襲われた頃には開会式の時間になってしまっており、作業を一旦、中断せざるを得なかった。何と云うことだろう。とても不安な気持ちのまま学術大会に参加せざるを得なくなった。そして開会式後、とうに一人目の講演の開始予定時刻であるのに、なかなか講演が始まらないのだ。どうも私の時と同様、接続がかまくまいていないようだ。このシステムそのものがダメなようだ。何でも自分に都合良く考える超プラス思考の私は、この時、全く根拠はないのであるが、それならこれが解決すれば自分も大丈夫だろうと安心した。そして、予定より30分遅れでやっと最初の講演が始まった。これほどまで講演スケジュールが遅れる学術大会はこれまでで初めての経験だったので驚いた。そして私の予想通り、担当者も要領を得たのか、直前の休憩時間に私の講演の準備は支障なく整ったのである。また、学会とは直接関係ないのだが、私の講演の直前に今回の台湾訪問時に会うことの出来なかった知人の代わりに、そのお母様とお嬢さんに初めてお会いした。お二人共とても上品かつ気さくな方であるうゑに、私のような理系人間からは想像も出来ないほど語学が堪能だった。特にお嬢さんはその聡明さに加え、私好みの謙虚かつ明るい超文系人間でもあり、さらに職業はファッションモデルではないかと思わせるようなルックスの持ち主でもあった。私はパブルの頃、かなり多くの現役ファッションモデルにリングルブラケット矯正法による治療（表からは見えない装置を用いた

矯正治療)をしていた時代があり、とても楽しかった若かりし頃が思い出されると同時に、その女性の端正さを兼ね備えた優美さが私の心をととても和ませてくれた。彼女とのこの一瞬の出会いにより、私の心から今回の学会だけではなく今年起こった様々な不幸な出来事が全て吹っ飛んだ。人間、いや男とは単純な生き物である。そう思うとともに、この嬉しいサプライズのお陰で、最高の状態、気分で、講演を始めることが出来たのである。無事講演(図4)を終えた後、いつも懇意にさせて頂いている台湾で最も有名な日本人矯正医のひとりから昼食のお誘いがあったので、既に学会で用意されていた昼食を丁寧にお断りし、先程お会いしたお嬢さんもお誘いして食事に出かけた。食事の場所は、何と昨日市内へ向かう途中で見かけて最も印象に残っていたあの巨大な中国建築風建造物だった。それは圓山大飯店という名の有名なホテルだった。7000以上の客室を備えているという。その二階にある市内が一望出来る有名なレストランで、台北の美しい眺望を楽しみつつ台湾料理の美味しさを堪能した(図5)。昼食後、学会会場に戻り、別の講演の後、久しぶりにお会いした台湾の先生らとともに市内観光に出かけた。特に、他の建物や周りの山々に対する101 Building(図6矢印)の圧倒的な高さは、大阪や東京の大都市を知っている私をも驚かせるのに十分だった。その夜は、総会と懇親会に参加した。懇親会場での突然のスピーチの指名は私をととても焦らせたが、スピーチの直前、映画のプレミアか何かの授賞式かと見間違ふようなドラマの音やライトを用いた演出に加え、ハイテンションの司会者の紹介が私をととても気分よくマイクの前に立たせてくれた。スピーチ下手の私でも、そんな雰囲気と勢いのある紹介の後に話すとなんげのスピーチに聞こえたのではないかと自分でも思えた。それ以



(図4)



(図5)



(図6)

外にも多くのサプライズがあった。カラオケを大勢で楽しみ(図7)、口にする食事はどれもとてもおいしく、伝統芸能やアクロバット等のプロの妙技は大変素晴らしく、特に一瞬にしてお面が変わるという変顔(ピエンリエン)にはとても感動させられた。私は物心ついた頃から、手先の器用さだけは誰にも負けない自信があったこともあり、学生時代、その特技を活かして、プロのマジシャンになりたいと考えていた。そして、マジックの教科書や教材を多く揃えたり、習いに行ったり、その勉強を真剣にしていたこともあり、テレビで見るマジックの種はほぼ全て分かるという特技を有していた。しかし、この変顔は目の前で見ていたにもかかわらず、ついぞ種が分からなかった。これもまた嬉しいサプライズだった。その後、フルーツパーティーに誘われ、とても美味しい台湾のフルーツを頂



(図7)



(図8)

きながら、皆で楽しいひとときを過ごした(図8)。それにしても、南国の地で皆と共に楽しく食べるフルーツはどれも甘くてとてもおいしかった。

学会二日目、興味深い内容の講演を拝聴した後、昨日観光案内をしてくれた先生方に加え、今回台湾を不在にしていた知人の代わりに観光案内を務めて頂くことになった昨日お会いしたお嬢さんとともに早めの昼食に出かけた。昨年台湾に行つて来られた先生お勤めの鼎泰豊(ディンタイフォン)で、小籠包と蝦仁焼賣に舌鼓を打った(図9)。その後は戦前、日本の帝国大学であり、そのお嬢さんが通っていたという台湾大学のキャンパスを見学したり、台湾の文化・スポーツの中心となっている広場に行ったり、蒋介石の記念館(図10)を見学したり、陽明山(図11)という鹿兒島で言う霧島に相当する山にも連れて行ってもらったりし、さらに、細かい気遣いもして頂き、これまでも最も楽しい観光の思い出となった。これらも予想外のとても嬉しいサプライズであった。観光旅行の後、い



(図9)



(図10)



(図12)

や学会大会の後、自分のデジカメにおさめられている写真を見ると、どういう訳かそのお嬢さんと一緒に撮った写真がとて多いのに気付いた。私はというと、写真撮影時にそのことを全く意識していなかったのもしかしたら、彼女はやたら私が一緒に写真撮影をすることに気付き、私に変なおじさんと思っていたのではないかと思うと、今になって、とても恥ずかしくなってきた。また、その時を振り返ってみると、そのお嬢さんのことだが、彼女の卓越したコミュニケーション能力のなせる技なのか、私との波長が合っていたのか、そのどちらかは分からないが、どうも彼女と一緒にいると、家族といような錯覚を覚えた。実際4人で観光に行ったのだが、私と彼女の2名が他の2名の先生方に観光案内されているような錯覚を覚えるほど、私としては二人でいることがごく自然なことのよう思えたらしいのだ。言い訳はこの位にしておいて、旅の恥は掻き捨てという言葉に胸に恥ずかしいことは全て忘れることにしたい。その後、Farewell party に出席

するために学会会場に戻った。運悪くこの日の夜はほぼ同時刻に2つのパーティーが予定されており、主催者による龍安寺の見学付きパーティーがあったのだがそれをお断りして、友人知人が多く参加する方のパーティーに参加した(図12)。その後、同世代の先生方と別の店に行き、夜遅くまで日本では出来ないお話をして盛り上がった(図13)。このように日本ではあまりお話する機会のない先生方と親しくなれるのも、また、日本ではしてはいけない話が堂々と出来ることも、海外の学会参加の良い点である。翌日は帰国するまでの間、台湾や日本の先生方とともに故宮博物院(図14)を見学し、器用さが取り柄の私も到底作ることの出来ないような入れ子になっている彫刻など、ヒトの技巧の限界を超越していると思える作品に感動し、最後の観光を終えた。そして、来年の九州矯正歯科学会で講演して頂く予定の先生に、北京ダックが売りの一流ホテルの有名レストランで、台湾料理をご馳走してもらった後、空港で知人のお母様に見送られ台湾を後にした。



(図11)



(図13)



(図14)

今回初めての台湾訪問だったが、わずか2～3日の滞在だったにもかかわらず、予想を遙かに超えたサブ

イズがあったことに加え、さらに不思議なことに、体調もかなり改善した。プログラムや論文集の表紙に始まり、パーティーや観光の際の台湾の方々の暖かいおもてなし、才色兼備のお嬢さんを含め素晴らしい方々との出会い、台湾の矯正医の素晴らしくリッチな様子を垣間見るなど、そのどれもが嬉しいサプライズだった。海外の学会参加は学術活動に役立つだけでなく、今回のように素晴らしい出会いや嬉しいサプライズによって、今後の人生をさらに豊かなものにしてくれる。もしかしたら、人生そのものを変えてくれる可能性だってある。また、日本では体験することの出来ない貴重な体験も出来るので、若い先生方は、是非とも研究を頑張って、一流の学術雑誌に論文を投稿し、それを発表する場である海外の学会に参加して頂きたい。あれっ？研究？論文？どうも説教まじりの文章になってきたようなので、この辺で稿を終えることにする。最後に、私のとりとめの無い話に最後まで付き合ってくれたこれこそサプライズものの読者の皆さんに敬意を表するとともに、講演の準備を手伝ってくれた医局員や留学生の皆さんをはじめ、台湾で篤く私をもてなしてくれた方々に感謝の意を表する。